

株価の変動が銀行貸出に与えた影響について

郵政研究所 芦原 一弥

1. 本研究では、90年代において日本の株価の変動が、銀行貸出に与えた影響について時系列データを用いて統計的な分析を行う。

2. 株価が下落すると、銀行の含み益の目減りを通じ自己資本比率などの経営指標が悪化する。するとBIS比率の達成や銀行経営の改善の目的で、銀行は貸出の伸びを抑制したり、場合によっては貸出の回収を積極化させていた可能性がこれまで指摘されている。本研究では、こうした銀行側の要因による資金供給を抑制する行動が見られたか否か統計的に検証する。

3. まず、株価を説明変数にし、被説明変数として銀行の貸出の前期比増加額をとり、回帰分析を行う。その結果、株価の水準が銀行の貸出の増加額に有意に正の相関があったことが確認される。また、運転資金は株価に対して短いラグで正の相関があったのに対し、設備資金では1年程度の比較的長いラグで正の相関が現れた。

4. 次に、資金の供給者だけでなく、資金需要者サイドの要因も考慮に入れて推計を行う。銀行貸出の下落が資金需要者の要因で引き起こされた可能性も考えられるからである。推計の結果、景気の代理変数が銀行貸出に正の相関があると同時に、株価も銀行貸出に正の相関が見られることが確認できる。このことから、銀行貸出は資金需要の減退だけでなく、株価の下落に対応した銀行行動によって何らかの影響を受けていたことが推測される。

5. 最後に、株価や景気の代理変数、銀行貸出にみられた相関が、90年代を通じて継続的に見られたものであったかをチャウ・テストで検証する。結果は、設備資金では93年前後に構造変化があったことが観察される。一方、運転資金では95年以降に断続して構造変化が現れることが読みとれ、さらに98年ごろは大きな構造変化があったことが観察される。